

であつたことを知つたのは、それから四五年して、私が大阪高等學校にはいり、日曜日毎に文樂座へ通ふやうになつてからだつた。

——右の思ひ出話を、つい最近、私の母——竹屋町の家を焼かれて、今は菅屋に住んでゐる母に會つた時に話すと、母はすぐに、

「さうや。榮三はんは鰻谷の濱側の家に昔からずつと住んではずたんや。あの人もたうたう亡くなりはつたな。」と言つた。

そして、次のやうな話を聞かせてくれた。

空襲が頻繁になりはじめた頃、吉田榮三の住んでゐた町内では、萬一の場合を慮つて、老人たちはみ

んな田舎へ疎開させる方針を取つた。ところが、榮三老人だけは、町會の人や隣組の人がいくら口を酸つぱくして勸めても、どうしても立ち退くことを肯んぜず、

「私は小さい時からここで育つて、ここから文樂に通うて修行をして、歳を取つた。ここは私に取つてこの世のなかで一番馴染の深い土地だす。もうこの歳になつて、他の土地へ行つて住むのんは御免だす。そやさかい、どうぞ放つといとくれやす。」

と言つてきかなかつた。

隨筆

しかし、老人が大阪の寶——と言ふよりは日本の寶のやうな得難い人であることを世間の噂で知り、晩年にあるこの藝道の人を尊敬し、この老人が自分たちの町内に住んでゐることを一種の誇りに思つてゐた町内の人々は、それだけに餘計もしものことがあつてはと、なほも何度も榮三に疎開を勧めた。が、老人は相變らず頑固だつた。

「どうぞ放つといとくれやす。私は、もう歳も歳やし、いつ死んでも構ひまへん。この鰻谷で死ねたら私の本望だす。どうぞ私をここで死なしとくなはれ。」

そして、吉田榮三は、永年住み馴れたわが家が焼けてしまふその日まで、たうとう鰻谷から動かなかつたと言ふ。

(作家)

砂 文 字

北 條 秀 司

私は生れてはじめて芝居を見た時の記憶を持たない。物心のついた時はもう私は芝居の棧敷に居た。いや、棧敷に抱かれながら物心がついたと云つた方がいゝかも知れない。

私の生れた北堀江の町には、二つの櫓があつた。一つは市

の側の堀江座で、當時伊達太夫（後の土佐太夫）達の人形芝居が常打になつて居り、もう一つの明樂座と云ふ小屋は大和家寶樂一座の仁和加芝居の根城であつた。

しかし母はそんな近くの芝居ばかりでなく、道頓堀の浪花座へも、御靈はんの文樂座へも、また時には西の千代崎橋をわたつて松島の八千代座あたりまでも、どしどし私を連れて行つたらしい。それには又私と云ふ子がまことに感心な子で、どんなに泣き喚いて居ても、チヨンと柝の音がするとハタと泣きやんだと云ふから遺傳のほどは恐しい。

さう云ふわけで、芝居に關する幼い日の私のゆめはさまざまなものゴツチャになつて居る上に、おまけに母の添乳話まで入り混つて居るものだから、時にはぬ恥を搔くことがある。

たとへばこれは芝居の話ではないけれど、例の有名な妻吉さん、あの人が堀江の山梅樓で兩腕を斬り落された事件あの事件なども私の頭の裡では、その當夜篠つく雨であつたこと、翌る日の朝、露次口の炭久と云ふ薪炭屋の主人が眞蒼な顔で口をわなゝかせながら

「よんべ、山梅樓はんの一階で人殺しがおましてな。妻吉つあんがあんた、傍杖食まで腕かひなを斬り落されはりましたんと！」

と喚き込んで來たその聲音、その表情まで、ありありと瞼の底にやきつけられて居るのだが、何時かその話をしてたら、筒井筒の妓が

「ちよつと待つとくれやす。何んぼ秀さんが頭がえゝちうて、そら一寸よすぎまつしやろ」

とひやかすので、念のため後で調べて見たら、なるほどその事件當時はまだ私は三つであつた。

芝居に關する記憶もそれと同じで、鴈治郎の靜御前が綺麗であつた印象も、齊入の鯉つかみが面白かつた思ひ出

も、どうも何處から何處までが自分のものであるか怪しいものだ。

鴈治郎の栗山大膳と福助（今の梅玉）の毛谷主水の暗試合の面白さなぞ今以て心の底にあるやうな氣がするが、それなぞも、ある日父の笠づけ仲間の材木屋泉正のおつさんが父に向つて

「山重、今度の黒田騒動だけは見といでや。紅葉の間で成駒屋はんが高砂屋を伏せるとこの鹽梅は何とも云へんで」と讚歎して居たその聲音までおぼへて居る所を見ると、

本當に自分で感心したかどうか頗る疑問だ。私の周圍はみんな成駒屋びぬきだつた。とりわけ母なんぞは

「昨日伏見屋はんの葬式に、新町會總代で成駒屋はんが京

隨筆

屋はん(雀右衛門)と一緒に来て呉れはつたが、その焼香の手つきのえゝこと云ふたら、まるで芝居やつた」と何にも彼もが感動の的になるのである。

唯つた一人だけ靱の乾物問屋の伯母はんだけが松島屋びゐきであつた。

あれは何時頃であつたか、何年振りの顔合せとやらで中座に沼津が出ることになり、鷹治郎と仁左衛門(先代)が和光寺の淡熊の墓の前で、仲直りの握手を行つた事があつたつけ。

大阪の顔役淡熊の墓のある阿彌陀池と云ふ龜の池は直ぐ私の家の裏手であつたので、當日の二階は藝表棧敷であつた。

定刻になると成駒屋は長三郎(今の又一郎)と二人連れで何れも黒紋附、松島屋の方は千代之助(今の我當)を連れて此の方は揃ひの久留米がすり、人波を押分けて墓前に現れ、拜んで、握手して、寫眞を撮つて何處かへ行つてしまつた。

「鷹治郎はんは上品でえゝなあ」と眼を細くする母へ、

「そやけど、わては松島屋はんの方が凛々しいてえなあ」と靱の伯母はすぐ挑戦的であつた。

天王寺商業を出る頃からそろそろ新しい演劇への憧れを

持ち出した私は、ある日同好の友を集めた演劇講演會に、

「鷹治郎を殺せ」と云ふ題目の下に滔々たる大阪演劇改革論を述べ立てて、父や母から

「阿呆かいな」と云はれた。

母はそのように芝居好きであつたが、眞逆自分の息子が芝居書きになるとは思はなかつたらしく、私が面白半分に書いた少女歌劇の脚本が寶塚で上演された時など、まるで奇蹟が行はれたやうな吃驚りのしかたで

「秀の書きよつたせうむないムスメ芝居が、金になりよるとはおもしろい事もあるもんや」と

と興がる父を促して初日の寶塚に行き、ちつとも面白くない歌劇を愉しげに見物した。

私の本格的な脚本が東京の新橋演舞場で脚光を浴びた時父はもう居なかつたが、母は父の位牌をそつと持つて見に来、大向ふがどつと哄笑する毎に、ぼろぼろ涙をこぼして居た。

いよいよ私が東京に家を持ち、背水の陣をしいて芝居と討死することに臍を固めた時も、一番に賛成して呉れたのは母であつた。

「みんなでお粥啜つてもえゝよつてな。何糞ちう氣でやんなはれ」

隨筆

と云つて呉れたその言葉が何よりも私を鼓舞して呉れた。

母は私の芝居の全部を觀たがいつでもきつと

「面白かつたで」

と云つて呉れた。劇評家に小つびどくやられて若干情氣で居る時でも、母の褒め言葉は慥かにも私にとつて大きな慰めであつた。

戦時下の榮養事情から床につき、いよいよ駄目になつた時、明治座では井上と八重子が「高梁風」と云ふのを演つて居たが、もう母は見に行けなかつた。と、丁度それが中繼されることになり、私は勇んでラヂオを母の枕邊に持つて行つた。

母はうつつにそれを聽いて居たが、すむと例によつて

「面白かつたで」

と、大分もつれて來た言葉で云ひ

「あなたの芝居は皆んな面白かつた」

と特別の附け足しがあつた。

芝居に關する限り、私は若干親孝行をしたと思ひ、比較的心残りは少ないが、しかし本當の母の心持は、息子が井上正夫や新國劇の壯士芝居ばかり書かないで、鴈治郎はんがしはつたやうな、ほんまの芝居が書いて貰ひたかつたのであらう。

(劇作家)

二月の文樂座

初代古靱、初代清六の七十年忌興行として一日初日

第一部「傾城阿波の鳴戸」(雛、勝太郎、松、清二郎、人形は龜松のお局、紋之助のおつる)一新作鶯宿梅(松、雛、越名濱、つばめ、清二郎、松之輔ら、人形は樂三郎のお光、紋司のお染、紋界の久松)「天網島」紙屋より大和屋まで(織、團六、人形は玉助の治兵衛、紋十郎のおさん)「阿古屋」(伊達つばめ、隅若、喜左衛門、寛弘ら、人形は文五郎の阿古屋、光造の重忠、玉徳の岩永)

第二部「紅葉狩」(住、呂、七五三、重造、友衛門、廣助ら、人形は紋十郎の更科姫、玉助の維茂)「道明寺」(相、古靱、清六、人形は文五郎の覺壽、紋十郎の相丞、龜松の宿彌太郎ら)「橋本」(住、重造、呂、友衛門、大隅、清八ら、人形は玉助の甚兵衛、玉徳の治武衛門、玉市の與次兵衛、光造のあづま、紋司のおてるら)「二人禿」(七五三、寛治郎ら、人形は龜松と光造の禿)

文樂座の第一部興行を若手連が擔當 文樂座では昨秋十月興行以來、每興行の千秋樂の翌日を若手向上會として來たが、今度はさらに一步進めて二月興行から第一部全部を若手級の受持とし、技藝の向上に一層の拍車づけを行ふことになつた。高野辰之博士逝去 日本歌論史研究の第一人者、東大講師高野辰之博士は長野縣下高井郡野澤温泉の自宅で一月二十五日逝去された。享年七十三

大阪歌舞伎座の能樂 去る一月二十八日、大阪歌舞伎座へ初めて能樂が進出した。朝日新聞社會厚生團主催の一梅若、金春、寶生三流能樂大會がそれで梅若猶義の「安宅」寶生重英の「羽衣」金春光太郎の半能「石橋」などが演能されその成果が注目された。